

毎日

毎日が

人生の

大晦日

本多 恵

『2025年難波別院カレンダー』12月のことば

掲示板のことば

今年の夏は梅雨明けが早く、極めて危険と言われる猛暑日が長く続きました。そんな中、お世話になった方々が次々とお浄土に還っていかれました。頻繁にお会いしていたわけではありませんが、もう会えないとなると本当に寂しく思います。

亡くなった方々が生きたかったであろう今日という一日……。もし、その一日を最後に与えられることがあるなら、どんなに有意義に生きられたことでしょうか。しかし、そんな一日を何となくダラダラと過ごし、「当たり前」として生きている私がい

ます。
大晦日は、一年の最後を締めくくる「仕切り」

の日です。一年間を振り返り、自分を見直すことができる大切な日です。本当は毎日が「仕切り」の日であり、「一期一会」なのでしよう。与えられた一日が、最初の出遇いであり、一度きりなのです。当たり前のことなんて、実は何一つないので。しかし、私自身、今日という一日を悔いのないよう精一杯生きたいと願いながらも、どこまでも「当たり前」として過ごしてしまいます。

蓮如上人は『御文』の中で、「後生の一大事を心にかけて」と教えてくださいます。そして仏さまから、毎日を大切に頂きながら、悔いなきあなた自身を生き抜きなさい、と願われているのだと思います。

(大阪教区教化センター)

今月のことば

一一いちいちのはなのなかよりは

三十六百千億さんじゅうろっぴゃくせんおくの

仏身ぶつしんもひかりもひとしくて

相好金山そうごうこんせんのごとくなり

宗祖は、この御和讃の
四句目に左訓さくんをつけてく
ださっています。

そう（相）はおお
かたち、こう（好）
はこかたち

「相」は、ものを詳しく
く見るという意味があり
ます。高い木に登って目
を凝らす、これが相とい
う字の成り立ちだそうで
す。「好」は、うるわしい、
すぐれて、仲の良い、総
じて喜ばしくこのむとい
う意味があり、ここでは
微細なものをととぶこ

ととなるでしょう
か。

今年は、私の母
校である小学校が
創立百五十周年を
迎えました。その
記念誌を手に懐か
しい少年時代に思

いを巡らせていました。
初めて校舎の屋上にあげ
てもらったときには、西
に二上山を望む、當麻寺
の塔が見える、鎌田の道
場の銀杏の木が見える等
と歓声を上げたものでし
た。三階建ての校舎屋上
からの景色を見て世界は
広いんだなと驚いたもの
です。

当時の幼馴染みとは今
でも交流しています。あ
る時彼は「僕はね、祖父
によく教えられ躰けても
らったんだ。まだ小さか

った僕を陽の当たる縁側
に呼んで話をしてくれ
んだ」と話してくれまし
た。彼の祖父は縁側から
庭の花を見つめながら「お
花というもんはな、きれ
いやな！健気けなげやな！と声
を掛けて讃ほめてやるもん
や」と教えてもらったそ
うです。そして彼は「振
り返ってみると、何でも
一から習うたんや。一つ
ひとつ教えてもらったこと
ばっかりや」とも話して
くれました。

どの教室にも広口の花
瓶があって、初夏には桔
梗、仲秋には鶏頭など四
季折々の花を皆で持ち寄
って飾りました。当時の
国語の教科書に牧野富太
郎博士のことばが紹介さ
れていました。確かムジ
ナモとオニフスベだった

と記憶しています。「雑草
という草はありません。
どんなに地味で小さいも
のにも名前がありそれぞ
れに住処すみかがあるのですよ」
と。

この世界の一一にとう
とい名があり、一一に
とうとい御苦労があり、
一一にとうとい出会い、
一一にとうとさがありま
す。今月の御和讃を拝読
しますと、奇しくもいま
でとうとい花に囲まれて
生まれ、その中で育て
いただきながら、よろこ
ぶべきことをよろこべな
かった私を、誠に恥ずか
しく思うことであります。

（日見 浄）

今月のことば出典『浄土和讃』

『真宗聖典』（初版）482頁

（第二版）576頁

『増補 真宗大谷派 勤行集』

（青本）123頁

「へ知ってる？ 仏事のあれこれ」

「御齋」おとき ってなあに？



「お食事だけではないのです」

大阪市 常榮寺 久世 見証

浄土真宗では報恩講や法要などの仏事の際に、集った人々で頂く食事を「御齋」と呼びます。

私のお寺でも、コロナ流行の前までは、報恩講初日、御伝鈔拝読ごでんしやうはいどくの前に小豆粥を頂いていました。（小豆なのは親鸞聖人の好物だからだそうです）本堂の台所で、婦人会の当番さんが大きなお鍋で作っておられました。その小豆粥は、コロナ禍で中断しましたが、今年は再開を考えています。

「お勤めの後、お膳について下さい」と言われる事が時々あります。法事後の会食も「御齋」です。

コロナ禍以前までは、前住職の都合がつかない時に、私が代わりに行くことがありました。当時は、二十歳過ぎでお酒もよく知らないのに、上座に据えられて、慣れないことに戸惑ったものです。父はお酒が好きでしたから「あんたも飲めるやろ」と、延々お酌をされたりもしました。

時には仏教に関する質問なんかも飛び出して、なかなか気の抜けない時間でした。

コロナ禍で、御齋に呼ばれする事はすっかり途絶えていましたが、コロナが少し落ち着いたらそんな頃、未熟児で産まれたお子さんの仏事を行いました。少し前に住職になって、葬儀は何度もしてきましたが、自分より若い、ましてや赤ん坊の仏事は初めてでした。連絡を受けて、すぐに自宅で枕勤めと通夜にかわるお勤めをしました。葬儀は行わず、次にご両親とお会いしたのは満中陰でした。それまでの一ヶ月余り、どんな話をしたのかと、悶々と過ごしました。

満中陰の後、納骨に立ち会い、御齋にもお呼ばれました。食事中、質問が来ることはありませんでしたが、少し弛んだ空気の中、しみじみと亡きお子さんの命を受け止めておられるように感じられました。その姿に、聞法の後に皆で場と時間を共有する、その大切さに気づかされました。

考えてみれば、月参りでいただくお茶の一杯も、ミニ御齋なのでしょう。こちらは毎日のことでも、門徒さんは月に一度です。研修や講座の後の懇親会も御齋です。その折角の法縁を、「ただ酒飯茶しゅはんちやなんどばかりに」世間話ばかりしては、蓮如上人に心配されてしまいますね。



仏教マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ 〈245〉

あなたのままが
ありがたい

